

小農(小生産者)に対する態度

……だから私はなによりもまず、中農にたいするプロレタリアートの態度についてのマルクス主義の基本的諸命題がどのようにして形づくられたかを、諸君に思いおこさせたい。このことを諸君に思いおこさせるために、私は、エンゲルスが論文『フランスとドイツにおける農民問題』のなかでおこなったいくつかの言明を読みあげよう。この論文は、1895年か1894年に書かれ、単行の小冊子として刊行されたものであるが、当時、ドイツ社会民主党のブレスラウ大会でこの党の綱領が審議されたことに関連して、農民にたいする社会主義政党の農業綱領の問題が実践的に日程にのぼっていた。当時エンゲルスは、プロレタリアートの態度についてつぎのような意見を述べた。「それではいったい、小農にたいするわれわれの態度はどういうものか？……第一に、フランスの綱領の命題、われわれは小農の没落が避けられないことを予見はするが、われわれの干渉によってこの没落をはやめることはけっしてわれわれの使命ではないという命題は、無条件に正しい。また第二に、われわれが国家権力をにぎったときには、大土地所有者を暴力的に収奪するほかはないが、小農をも同じように暴力的に収奪する（有償であろうと無償であろうと同じことである）というようなことを考えるわけにいかないことも、同様にはっきりしている。小農にたいするわれわれの任務は、なによりも、力づくではなく、実例とそのための社会的援助の提供とによって、小農の私的経営および私的所有を協同組合的な経営および所有にうつすことである」〔第17巻、447ページ〕。

さらにこの問題についてエンゲルスはこう言っている。「われわれは分割地農民にむかって、資本主義的生産の優越した力にさからって個人所有と個人経営を維持してやるというような約束を、断じてあたえることはできない。われわれが彼らに約束できるのは、彼らの意志に反して暴力的に彼らの所有関係を侵害することはない、ということだけである」〔同、449ページ〕。

最後に、私が諸君に思いおこさせたい最後の格言は、富農についての、大農についての（ロシア語で言えば「クラーク」についての）、つまり雇用労働力を使用せずにはやっていけない農民についての考察である。もしこれらの農民が彼らの今日の生産様式の没落が避けられないことを理解せず、自分たちのために必要な結論を引きだすことができないなら、マルクス主義者は彼らのためにどうしてやることもできない。われわれの義務はただ、彼らにたいしても、新しい生産様式への移行を容易にしてやることだけである〔同、453ページを参照〕。

以上が私として諸君に思いおこさせたい命題であって、これらは、疑いもなく、共産主義者ならだれでも知っているものである。この命題から、国家権力をにぎったプロレタリアートの任務は、資本主義的大規模農業制度が優勢な国々と、遅れた大、中、小の農民が優勢な国々とは、けっして一様ではありえないことがわかる。われわれは、搾取者たる地主にたいしては戦いがわれわれの義務であったと言ったが、これはマルクス主義の任務をまったく正確に述べたものであることがわかる。

中農についてはわれわれは言う、——断じていかなる暴力ももちいるな、と。大農についてはわれわれは言う、——われわれのスローガンは、彼らを穀物専売に服従させよ、彼

らが穀物専売に違反するとき、穀物をかくすときには、彼らとたたかえ、ということである、と。私は最近数百人が出席した集会でこれらの命題をくりかえして述べるおりがあった。それは、第六回〔ソヴェト〕大会と時を同じくしてモスクワで会合をひらいた貧農委員会代表の集会である〔本巻、177~184 ページ〕。われわれの党文献では、宣伝と煽動では、われわれはつねに、大ブルジョアジーと小ブルジョアジーとにたいするわれわれの態度のこの差異を強調してきた。だが、理論上はみな同意していながら、けっしてみなが適切な政治的結論を引きだしたわけでも、また十分急速に引きだしたわけでもない。私がおぼろげと、いわば遠まわしに話をはじめたのは、小ブルジョア民主主義派にたいするわれわれの政策の問題を、争う余地のない基礎のうえに提起するためには、われわれは諸階級の相互関係についてのどういう経済的概念を指針とすべきかを、諸君にしめすためである。疑いもなく、この小農民階級（われわれは、自分の労働力を売ることのない農民を中農と名づける）、この農民が、ロシアではとにかく主要な経済的階級であって、これが、小ブルジョア民主主義派の内部に存在するきわめて多様な政治的潮流の基礎である。わがロシアでは、これらの潮流は、なによりもメンシェヴィキおよびエス・エルの諸党と結びついている。ロシアにおける社会主義の歴史には、ボリシェヴィキとこれらの諸党との長期にわたる闘争があった。……

現在わが党の任務は、自己の戦術をえらぶにあたって、階級関係を指針とすることであり、これはなにかということを一すなわち、偶然や、無定見の現れや、なんの基盤ももたない動揺であるのか、それとも反対に深い、社会的根源をもつ過程であるのかを、この問題で正確に分析することである。……

われわれは、地主と資本家をひきつづき仮借なく収奪するという立場に立つ。この部面ではわれわれは容赦しないし、この部面ではわれわれは和解または協調の道に立つことは断じてできない。だが、小規模生産を命令によって大規模生産にうつすことはけっしてできないということ、この部面では漸進的に、事態の経過によって、社会主義が避けられないことを納得させなければならないということ、われわれは知っている。これらの分子は、けっして信念にもとづく社会主義者になることはないであろうし、率直な、真の社会主義者になることもないであろう。彼らは、活路がないことをさとったときに社会主義者になるであろう。現在彼らはヨーロッパがひどく崩壊し、帝国主義がひどい窮状に陥ったため、ブルジョア民主主義がなんの助けにもならず、ソヴェト権力しか助けとなりうるものがないことを、見ている。だから、現在小ブルジョア民主主義派のこの中立主義、この善隣関係は、われわれにとって恐ろしくないばかりか、望ましいものである。だから、独裁を実行する階級の代表者の見地からこの問題を見るばあい、われわれはつぎのように言う。——われわれは、小ブルジョア民主主義派からはこれ以上のことをけっして期待しない。われわれにはこれで十分である。諸君はわれわれと善隣関係をたもち、そしてわれわれは国家権力をたもつであろう。……われわれは国家権力を自分の手に、**自分の手だけ**にたもつ。われわれと中立の関係にはいる者にたいしては、われわれは、政治権力を自分の手中ににぎり、自分の武器の鋒先をことごとく地主と資本家に向けている階級の立場から論じる。この階級は、小ブルジョア民主主義派にむかってつぎのように言う、——もし諸君がチェコスロヴァキア軍団やクラスノフー派の味方になりたいのなら、われわれはどうたたかうかをこれまでしめしてきたし、今後ともこれとたたかうであろう。またもし諸

君がボリシェヴィキの手本をまなびたいのなら、われわれは諸君との協調の道にすすもう。

注) ……は本文中、……………は青山の略

第28巻『モスクワ党活動家会議』P210～212 1918. 11. 27

ポイント

わが党の任務は、自己の戦術をえらぶにあたって、階級関係を指針とすることであり、偶然や、無定見の現れや、なんの基盤ももたない動揺であるのか、それとも反対に深い、社会的根源をもつ過程であるのかを正確に分析することである。

大農については、もしこれらの農民が彼らの今日の生産様式の没落が避けられないことを理解せず、自分たちのために必要な結論を引き出すことができないなら、マルクス主義者は彼らのためにどうしてやることもできない。われわれの義務はただ、彼らにたいしても、新しい生産様式への移行を容易にしてやることだけである。

中農についてはわれわれは言う、「断じていかなる暴力ももちいるな」と。小規模生産を命令によって大規模生産にうつすことはけっしてできない。小農階級(中農)にたいするわれわれの任務は、漸進的に、事態の経過によって、なによりも、力づくではなく、実例とそのための社会的援助の提供とによって、小農の私的経営および私的所有を協同組合的な経営および所有にうつすことによって、社会主義が避けられないことを納得させることである。

現在の小ブルジョア民主主義派のこの中立主義、この善隣関係は、われわれにとって恐ろしくないばかりか、望ましいものである。われわれは、小ブルジョア民主主義派からはこれ以上のことをけっして期待しない。われわれは、小ブルジョア民主主義派にむかってつぎのように言う、「もし諸君がチェコスロヴァキア軍団やクラスノフー派の味方になりたいのなら、われわれはどうたたかうかをこれまでしめしてきたし、今後ともこれとたたかうであろう。またもし諸君がボリシェヴィキの手本をまなびたいのなら、われわれは諸君との協調の道にすすもう」と。